

令和7年度 第34回 全国女性建築士連絡協議会（やまがた）報告書

「山形から発信 みらいへつなぐ木への挑戦」

～雪・山・川がおりなす食文化と共に～

0. 概要

日程：令和7年7月19日（土）～20日（日）

会場：山形県山形市 山形テルサ

参加：兵庫士会より、リアル参加3名（山本（和）・尾ノ井・有賀）、WEB（正木会長・渡邊・野山・守山）4名 計7名

1. はじめに

第34回全国女性建築士連絡協議会が、山形県にて開催されました。各地域から多くの女性建築士が参加し、災害対応や木造建築の可能性、地域との関わりについて学び、交流を深める貴重な機会となりました。

2. 被災地報告

被災地報告では、以下の4つのテーマに沿って、各地の現状と取り組みについて報告が行われました。

- ・山形県北部豪雨
- ・令和6年 能登半島地震
- ・福岡県建築士のつどいでの災害対応活動報告
- ・阪神・淡路大震災から30年
～建築士会活動と一建築士として～

特に阪神大震災から30年という節目の報告では、兵庫県建築士会女性委員長・山本氏より、震災当時の記憶から現在に至るまでの活動報告がなされました。まちとの関わりを持ち続け、さまざまな団体と連携しながら活動を続けてきた経緯が語られ、「普段からのネットワークの重要性を強く感じた」との言葉が印象的でした。



3. 基調講演

基調講演では、木造建築の魅力と未来について、以下の2名の建築家による対談形式で講演が行われました。

- ・瀬野 和広 氏 木造建築の可能性「ウッドチェンジからウッドリターンの理由」

講演タイトルは「設計者よ、山に恋せよ」。木の持つ可能性、地域と自然資源のつながり、そして山と建築の関係性について熱く語られました。お二人のこれまでの作品や設計の過程を通して、木材の利用が持つ社会的・環境的意義についても再認識する機会となりました。

講演の中で瀬野和広氏は、「ここは木の国ではないか」という問いかけから始まり、木という素材の魅力とその可能性について熱く語られました。

特に印象的だったのは、「古民家はなぜ腐らないのか」という視点から、木の乾燥方法に着目されていた点でした。天然乾燥された木材が、トレーサビリティデータ付きで管理されているという現場の取り組みには、多くの参加者が驚きと関心を寄せました。

また、「木を表装美人より骨美人に」という言葉も紹介され、見た目だけでなく構造的な美しさや本質の重要性を再認識させられました。

そして講演の締めくくりでは、「設計者よ、山に恋せよ」という印象的なフレーズとともに、「山と共に考えるべき責任があるのではないか」という深い問いかけがなされ、参加者一人ひとりの心に響く講演となりました。

・鍋野友哉氏 講演「木造建築の可能性 ～山と地域と未来をつなぐ架け橋～」
鍋野友哉氏は、「山と地域と未来をつなぐ架け橋」をテーマに、木造建築の可能性について語られました。

農学部出身で、学生時代には林業実習で測量や枝打ちを経験されたことから、**「素材と向き合い、素材から考える」**という姿勢を大切にされてきたことが印象的でした。

自邸である「束根の家」では、特徴的なヴォールト屋根と、それを支える箱状の厚さ 36 ミリの CLT を持つ構造体を設計。これにより、木の持つ力を最大限に活かし、空間としての美しさと構造としての合理性を両立させていました。

また、建築は単体で完結するのではなく、山や地域、未来を見据えたつながりの中で考えるべきものであるとし、設計者の責任についても深く言及されました。

4. 大懇親会

1 日目の締めくくりとして開催された大懇親会では、山形ならではの文化や温かなおもてなしを感じる時間となりました。

乾杯の際には、山形市の市条例により「乾杯は日本酒で」という地元の決まりに則り、地酒で乾杯。全国から集まった女性建築士が「ワンバイワン」形式で地域の取り組みや現状について紹介し合い、活発な交流が行われました。

また、会場では「やまがた愛の武将隊」による力強いパフォーマンスも披露され、華やかさとエネルギーあふれるひとときとなりました。地域の文化や歴史を活かした演出は、参加者の心に深く残るものとなりました。



5. 分科会・エクスカージョン（7 月 20 日）

協議会の翌日には、分科会およびエクスカージョンが行われました。参加者はそれぞれの興味に応じて分科会に参加し、エクスカージョンでは現地見学を通じて地域と建築の関わりについて理解を深めました。

■ 分科会 B：「古民家復権作戦」

本分科会では、「古民家」の価値と活用の可能性に焦点を当て、保存と再生のあり方について議論が行われました。地域に残る歴史的建築物を守りながら、現代の暮らしの中でどう活かしていくか、事例紹介や意見交換を通して多くの学びがありました。古民家再は単なる修繕にとどまらず、文化的・経済的資源としての可能性を再評価する取り組みであることが再認識されました。

■ 分科会 D：「伝統とみらいを繋ぐ古民家再生」

群馬士会の中野さんからは、古民家改修の実績を、自身で購入された物件を地域に開かれた拠点として、またその物件を活かすための事業展開も話していただきました。福岡士会の近藤さんからは、古民家をホテルにコンバージョンした事例をもとに、法律を含めた設計手法について説明があり、大変勉強になりました。

■ 分科会 E：「建築士の役割を一般の方にわかりやすく伝える／林業木材産業との協働の中で」

秋田県からは、能代市木材産業連合会の県産木材利用についての研究・連携・促進・実績と、女性会員による金足農業高校造園緑地科での（県内・国内外）建築・土木の建造物と地域にある災害対策建造物を紹介する出前授業の活動報告がありました。

和歌山県からは、女性委員会による県産材を利用した木材の組み立てキット(時間割・カレンダー)作成についての活動報告と、木の国わかやま木育キャラバン実行委員会における林業・木加工業者との連携した「県産木材のおもちゃに子供が触れる」イベント紹介がありました。各報告者共に連携と継続の重要性を強調されていました。

■ エクスカーション：E「本館 古勢起屋（登録有形文化財）見学と銀山温泉宿泊コース」

午後には、山形県が誇る歴史的温泉地「銀山温泉」へのエクスカーションに参加しました。案内役は、基調講演でも登壇された建築家・瀬野和広氏。瀬野氏が実際に改修に携わった本館古勢起屋（こせきや）を現地で見学し、設計時の想いや苦



労、材料選定の工夫、文化財としての保存と現代的価値の両立など、貴重な解説を直接伺うことができました。断熱を既存の窓や壁でするのではなく、その内部にて壁や建具を用いてされていることで、外観を変えることなく銀山温泉の街並みに溶け込むように丁寧に手が加えられた建物を実際に歩いて感じることで、設計・施工の力、そして地域文化へのリスペクトの重要性を深く体感する機会となりました。

6. まとめ

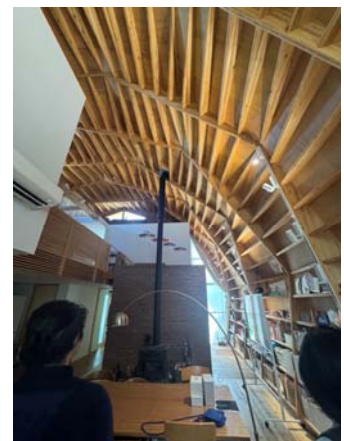
本協議会を通じて、女性建築士が果たす役割の多様性と、地域と建築の未来への可能性を再確認することができました。災害報告におけるリアルな声、木造建築への想い、古民家再生への取り組み。どれもが、日々の仕事に新たな視点をもたらす内容でした。

7. おまけ

協議会後の貴重な機会として、鍋野友哉さんのご厚意により、ご自邸「東根の家」を見学させていただきました。

特徴的な大屋根の無柱空間は、開放感と力強さを兼ね備えた設計で、木の力を存分に体感できるものでした。CLT（直交集成板）を活用した構造や、太陽光パネルの発電効率を高めるための井戸水冷却システムなど、細部にわたる工夫から、木材を活かした建築の可能性と未来へのヒントを感じ取ることができました。

実際に建築家自身が住まう空間を体験することで、講演で語られていた理念や思想が一層リアルに伝わり、心に深く残る見学となりました。



8. 参考

https://www.kenchikushikai.or.jp/torikumi/jyosei-iinkai/34th_info.html

報告：尾ノ井、有賀、山本（和）